

と き: 2013年1月18日(金)  
18:30~20:30  
ところ: 松山市三番町6丁目4-20  
コムズ 5階 大会議室

## 「親を亡くした子どもの心のケア」

阪神大震災が、あしなが育英会にとっての遺児ケアの出発点になった。



あしなが育英会  
レインボーハウス チーフディレクター  
八木 俊 齊 さん

### 「黒い虹」、震災遺児の心の傷

小学校5年生のかっちゃんは、赤、青、緑、黄色の4色の虹の絵を描いた。しかしその虹は赤の部分を上から黒く塗りつぶし、背景も真っ黒。星や月も書きたされ、夜空に架かるまさに黒い虹であった。かっちゃんだけではなかった。作文でも震災遺児たちの悲しみや心の衝撃の大きさを目のあたりにした。

### 死にたかった

中学1年 T・M

じんの時、二段ベットにねていたら、  
ゴーツと地なりがして、ものすごくゆれた。  
ゆれたかと思うと、ドッスンと家がつぶれて下じきになった。  
その時、私は「もう死ぬんじゃないか」って思った。  
もし、死んでもべつにくいはないから、  
死にたかったな。  
そうしたら、そのかわりにお父さんもお母さんも助かったかもしれないのに……。  
ごめんなさい。



『黒い虹』秋元かつひと (小学5年)

## 激震、その後

1995年1月17日午前5時46分、列島が揺れた。

震災4日後、あしなが育英会の理事会で震災遺児奨学金特例処置を決定し、職員2名を現地に派遣した。震災孤児に奨学金を渡すため行政に遺児名簿作成を依頼したが、現場の混乱とプライバシー保護のために断られた。「自分たちで捜しだすしかない」と決心し、震災遺児探しの「ローラー調査」が始まった。

新聞の犠牲者名簿で現場に行き、近所の方に犠牲者の方にお子さんはいなかったかをお聞きしたり、家族の避難先を訪ねた。毎日20キロから30キロは歩く。ボランティア学生や職員など30人ほどが床、机に雑魚寝生活。延べ881人が34日間で504人まで震災遺児を確認した。

捜しだした子どもたちの心が心配だ。つどいを開こう。ゆっくりさせてあげたい。同じ境遇の人たちがいる。温かいお風呂に入ってもらいたい。3月26、27日に有馬温泉で1泊2日の「ありまのつどい」を開催し、震災初期の活動を終了した。

### 「黒い虹」、震災遺児の心の傷

しかし、「ありまのつどい」で泣きながら語られる言葉。作文用紙を前に黙って泣き続ける姿。震災遺児への長期的な支援の必要性を考え、東京以外で初めての「あしなが育英会」神戸事務所を設置し、職員が常勤した。

95年8月、第2回震災遺児のつどい、海水浴の「香住のつどい」を開催した。ボランティア学生にパンチャキックを浴びせて暴れまくる子。逆にうつむき、一言も言葉を交わさない子。海や川で遊ぶプログラムの他に、「思い出を残そう」とトーテムポールを作り、横長の板にみんなで絵を描いた。

小学校5年生のかっちゃん、赤、青、緑、黄色の4色の虹の絵を描いた。しかしその虹は赤の部分を上から黒く塗りつぶし、背景も真っ黒。星や月も書きたされ、夜空に架かるまさに黒い虹であった。かっちゃんだけではなかった。作文でも震災遺児たちの悲しみや心の衝撃の大きさを目のあたりにした。「もし、死んでもいいから、死にたかったな。そうしたら、そのかわりにお父さんもお母さんも助かったかもしれないのに」。

同じ月に行った遺児家庭実態調査でも、遺児のショック、悲しみ、罪悪感、信じられないような体験、今でも大変厳しい状況が浮かびあがってきた。「トイレなど暗いところ、狭いところに入れない」、「少しの揺れでも極度におびえる」、「母を守るつもりが首を絞めてしまって死んでしまったのでは」と、ずっと自分を責める子、「私が死んだほうがよかった」など。

### 遺児のケアセンター、「レインボーハウス」

「なんとかしなければいけない」、ボランティアも職員も感じた。

遺児のケアをしているところはないか、日本中を探した。カウンセリング、心理、自助グループなどの関係をあたった。しかし、どこも遺児のケアをしているところではなかった。日本では見つからなかった。「自分たちで作るしかない」。

「震災遺児の駆け込み寺が必要だ」。震災遺児に黒い虹という心の傷が架かっているならば、その虹を7色の虹にしたい。レインボーハウスの建設計画が始まった。

八木俊介・著「レインボーハウスのこどもたち」より

# Do

主催：NPO法人「Do」(松山市委託事業)

後援：松山市教育委員会・松山市民館連絡協議会・松山市人権教育推進協議会  
愛媛新聞・NHK松山放送局・南海放送・テレビ愛媛・FM愛媛・あいテレビ  
愛媛朝日テレビ・愛媛CATV・リビングまつやま